

北海道社会保険病院だより

平成17年11月15日 第16号

インフルエンザについて

呼吸器科主任部長 秋山也寸史

インフルエンザとは

インフルエンザとはインフルエンザウイルスによる感染症です。どの痛み、咳、鼻汁など普通のかぜにみられる症状を伴いながら、38～41の高熱と頭痛、熱感、悪寒、筋肉痛、関節痛、倦怠感などの全身症状が突然始まります。多くの人は特別の治療を行わなくても1～2週間で自然に治癒しますが、乳幼児、高齢者、心臓や肺に疾患のある人は、脳炎や肺炎を合併したり、もともと疾患の悪化を招いて、最悪の場合死に至ることもあります。

普通のかぜは、ライノウイルスやコロナウイルスの感染によつて起こります。呼吸器の症状はインフルエンザと似ていますが、熱はインフルエンザほど高く上がりませんし、全身症状は少なく、重症化することはほとんどありません。

また、インフルエンザは基本的に流行性の疾患で、札幌では毎年12月～3月に流行します。診断は臨床症状と、鼻やのどの粘膜を綿棒で拭つてウイルスタンパクの有無を調べる

検査により行ないます。このウイルスタンパクの検査は通常30分以内に結果が分かります。

インフルエンザウイルスの種類

インフルエンザの原因となるインフルエンザウイルスは、大きくA型、B型、C型に分類されます。

A型はさらに、ウイルスの表面にある赤血球凝集素（15種類、Hと略します）とノイラミニダーゼ（9種類、Nと略します）という2つの糖タンパクの違いによつて細かく分類

されます。現在、人から人へと感染し、流行を起こしているのはA型とB型で、2004・2005年のインフルエンザシーズンに札幌で流行したウイルスは約60%がB型で、残りの大半がAノソ連型（H3N2亜型）でした。その他Aノソ連型（H1N1亜型）もわずかに認められました。

インフルエンザに

かからないためには

インフルエンザへの感染は、インフルエンザにかかっている人の咳、くしゃみやつばの飛沫の中にあるウイルスを吸入することで起こります。インフルエンザウイルスは、鼻、のど、気管、気管支の粘膜の細胞へ感染しその中で増殖します。感染した人が高熱を出して発症するまでの潜伏期は1～5日（平均3日）といわれています。空気が乾燥するとのど

インフルエンザウイルスの電子顕微鏡写真



1つ1つの粒子がインフルエンザウイルス。ウイルスの外側に多数認められる突起が、赤血球凝集素（H）とノイラミニダーゼ（N）

の粘膜の防御機能が低下するので、インフルエンザが流行する時期には、外出時にはマスクをしたり、部屋で加湿器を使ったりすることが勧められています。また、帰宅時のうがい、手洗いも普通のかぜの予防とともに励行しましょう。また、高齢者や慢性疾患を持っている人は人混みへの外出を避けるようにし、出かける際にはマスクをしましょう。

インフルエンザワクチンの発症予防効果は、ワクチン株と流行株が一致している場合には、約70〜90%と報告されています。そのためワクチンは予防の基本とされ、毎年の流行が始まる前、遅くとも12月上旬までに済ませておくことが勧められています。予防接種については、病気への治療ではないので健康保険が適応されません。原則として全額自己負担となりますが、65歳以上の人と、60歳以上65歳未満で心臓や腎臓、呼吸器などに重い病気を持っている人は、予防接種法による定期の予防接種の接種対象となり、負担軽減措置があります。通常、成人では1回接種、13歳未満の小児では2回接種で行います。

インフルエンザの治療

ウイルスが増殖するのを抑える治

療薬（抗ウイルス剤）は、普通のかぜウイルスに効くものはまだありませんが、インフルエンザウイルスに対しては、現在日本で3種類の薬が用いられています。これらの抗ウイルス剤は発症後、48時間以内で、しかもできるだけ早くに内服（あるいは吸入）し始めることで症状を軽くしてくれます。そのため、突然の高熱などインフルエンザが疑われる時にはすぐに医療機関を受診して診断を受けることをお勧めします。65歳以上の高齢者や慢性の呼吸器あるいは心疾患などを持っている人で、同居している人がインフルエンザにかかった人には抗ウイルス剤を予防薬として使用することが認められています。予防薬としての使用には健康保険が適用されません。

その他、咳止め、解熱剤や、二次的な細菌感染への抗生剤などが治療に用いられますが、解熱剤については注意が必要です。特に15歳未満のインフルエンザ患者では、ある種の解熱剤（アスピリンなどのサリチル酸系解熱鎮痛剤、ジクロフェナクナトリウム、メフェナム酸など）を使うと、脳炎あるいはライ症候群（けいれん、嘔吐、肝障害など）を引き起こす可能性があると考えられています。市販の感冒薬や鎮痛解熱剤にもこれ

らを含むものがありますので使用上の注意をよく読むことが必要です。

鳥インフルエンザについて

インフルエンザは、実は人と人間のだけで伝染するのではなく、動物もかかる、いわゆる人畜共通感染症といわれる疾患の1つです。中でも鳥類は、前に述べた15種類の赤血球凝集素（H）と9種類のノイラミニダーゼ（N）の様々な組み合わせのウイルスが感染します。

これまでに知られているインフルエンザの世界的な大流行は、それまで人の間での伝染がなく人が免疫を保持していなかった型のウイルスが、鳥の間だけに伝染していた状態から鳥から人にも伝染するようになり、さらに人

から人へと伝染する様に変化した時に起こったと言われています。1997年に初めて人への感染が香港で報告された鳥インフルエンザA型（H5N1亜型）は、肺炎、腎障害、肝障害を高い頻度で合併し、約半数の患者が命を落とす重篤な疾患です。その後も東南アジ

ア各地で人での発症が報告されていますが、現在のところ養鶏業者など鳥と濃厚な接触をする人に鳥から感染した場合が大半で、人から人へはほとんど伝染していません。しかし、ウイルスは急速にその性質を変化させており、いつか人から人への伝染が起こるのではないかと世界保健機構（WHO）を始め各国の保健医療機関がその推移を見守っています。万が一に備え、報道の内容に注意し、インフルエンザ一般の予防を心掛けて、急な高熱を伴うかぜ症状を自覚した時には直ちに医療機関を受診することが必要です。

編 集 後 記

11月9日に札幌市内で初雪が観測されました。これは昨年よりも14日も遅いそうです。昨年より遅いとはいえ寒い冬は来てしまいます。これからの季節、風邪、インフルエンザには十分ご注意ください。

編集責任者
事務局 佐々木憲一

北海道社会保険病院
TEL : 011-831-5151
URL: <http://www.hok-shaho-hsp.jp/>